

■中傷に対する訓練(2/3)

ダビデはそれよりずっと前に、何回となく同じような出来事にあい、すべてを正しくさばかれる主にお任せするということを体得していた。たとえば、まだ若かったころ、ナバルの忘恩と毒舌に対して、ついに堪忍袋の緒を切ってしまったことがある（ある人々は、彼のあのよう態度もやむをえなかったと考えるかもしれないが）（1サムエル 25:2-13）。しかし、神の恵み深い摂理により、アビガイルから温和に道理を聞かされて、いさめられ、叱責された。「むだに血を流したり、ご主人さま自身で復讐されたりしたことが、あなたのつまずきとなり、ご主人さまの心の妨げとなりませんように」（25:31）。ダビデはこのとき、悪をもって悪に報いることはすまいと決心し、神が必ず彼の疑いを晴らしてくださることを学んだのである（32-38節）。

ダビデの学んだこの教訓は、私たちにもこの訓練が必要であることを物語るかのように、詩篇のほとんど各ページごとに大きく記されている。彼は祈った。「主よ、お救いください。聖徒はあとを絶ち、誠実な人は人の子らの中から消え去りました。人は互いにうそを話し、へつらいのくちびると、二心で話します。」そして主の保証を得た。「悩む人が踏みにじられ、貧しい人が嘆くから、今、わたしは立ち上がる。わたしは彼を、その求める救いに入れよう」（詩篇 12:1, 2, 5）。

彼は驚きのあまり、こう叫んだこともある。「暴虐な証人どもが立ち私の知らないことを私に問う。彼らは善にかえて悪を報い、私のたましいは見捨てられる。しかし、私は一、彼らの病のとき、私の着物は荒布だった。私は断食してたましいを悩ませ、……私の友、私の兄弟にするように……泣き悲しんだ。だが、彼らは私がつまずくと喜び、相つどい……共に私を目ざして集まり、休みなく私を中傷した」（35:11-15）。

彼は、神の助けにより、「私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。私の口に口輪をはめておこう。悪者が私の前にいる間は」と決心した

(39:1)。またこうも言っている。「私は悪者の横暴を見た。彼は、おい茂る野生の木のようにはびこっていた。だが、彼は過ぎ去った。見よ。彼はもういない。私は彼を捜し求めたが見つからなかった」(37:35, 36)。

彼は深い、しかも長く続いたある経験をしたとき、こうあかしすることができた。「あなたのいつくしみは、なんと大きいことでしょう。あなたはそれを、あなたを恐れる者のためにたくわえ、あなたに身を避ける者のために人の子の前で、それを備えられました。あなたは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。ほむべきかな。主。主は包囲された町の中で私に奇しい恵みを施されました」(31:19-21)。

詩篇 3 篇は、その冒頭に記されているように、ダビデがアブシャロムを避けて逃れたときに歌ったもので、ダビデのそのときの心中を、実にありありと正確に描き出している。彼に逆らって立つ者が多かったが(1 節)、彼は、「しかし、主よ。あなたは私の回りを囲む盾、私の栄光、そして私のかしらを高く上げてくださる方です」と言うことができた(3 節)。このように彼に逆らって立つ多くの人々のうちでも、シミイほど執拗で腹だたしいうるさい人間は、ほかにはいなかった。しかし、それにもかかわらず、心碎かれたダビデは、寛大にも、「彼にのろわせなさい」と言うことができた。

激しく鋭い毒舌にも服し、「柔らかな答えは憤りを静める」こと(箴言 15:1)を実証したのは、ダビデばかりではない。モーセはその時代の人々のうち最も柔和な人と言われた人であるが、自分の率いる群衆からだけでなく(もしそれだけなら見過ごすこともできるであろうが)、自分の兄や姉からさえ、妻のことに理由のない非難を受け、ののしられ、侮辱された(民数 12 章)。また、コラとその共謀者たちの激しい悪口の前に立ったとき、ただ顔を伏せて、すべてを神にゆだねるほかはなかった(民数 16 章)。至高者なる神は、このどちらの場合にも、ご自身に信頼するモーセの謙虚さを賞賛してくださったのである。

【V・レイモンド・エドマン 人生の訓練 第七章「中傷に対する訓練」より】
※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい。